

は四〇歳前後、つまり剛より十前後年上に見えた。
 「長らくご無沙汰しております。いつもご供養ありがとうございます。」
 どうぞお納め下さいと、持っていたお菓子の箱を差し出した。
 昨夜二時発の夜行バスに乗る待ち時間のうちに高速バスミナル内の売店で買ったものだった。今住んでいる埼玉県の代表的な銘菓、草加煎餅の詰合せだった。
 「女性はやっと全身を扉の前に現した。大きめの白いTシャツと花柄のホットパンツでふくやかな体格をコーディネートしていた。お菓子の包装紙から剛の顔へと転じた目がやはりずっと円く見開いたままであることから、驚いているのではなく普段からこういう表情なのだろうか。驚いているのではなく普段からこういう剛は住居が遠隔地にあることから五年間一度も訪れなかった非礼を詫び、その間墓を守っていたことへの感謝を述べた。
 「はい、え、こちらの方こそ何もしませんでしたと小高い丘状になった墓地を深くおじぎをし、ではご案内しますと小高い丘状になった墓地を手で示した。
 女性の後に付いてゆい勾配を上っていくにつれ、あたりの光景にうつすらと既視感のようなもの重なっていくことを期待したが、そのはならなかった。日頃から趣味としても寺社仏閣の類に赴くことのない剛にとつて、すべてが新鮮なままだった。
 道が平坦になり、立派な囲いのある大小さまざまな墓を眺めながら、白い砂利を踏みしめていく。
 「墓石には家名より大きく「心」「空」「永眠」のほか、「ありがとう」「いつかまた」などの文字が刻まれている墓もあった。剛と同じ「佐藤家」と記されたものはいくつかあった。よくある苗字だから不思議はないが、遠縁の親戚かもしれないと思うと、やはりこの寺にちがいをなく、丘のまわりに植えられた樹木が地面に影を落としていた。
 「あそこにはボーリングの球みたいに丸いお墓がありますね、あの裏手にあります。」
 立ち止まった女性が右腕をのばして墓石群の中程を指差した。すぐそばまで誘導してくれるものと期待していた剛は、言葉に詰まりながら礼を言った。
 「お経のほうは、あげさせてもらいますか？」
 「是非お願いします」といって剛はリュックのサイドポケットからお施の紙を取り出し、両手で渡した。
 「さ、それにしては女性斜面を下りていった。五年前に会った住職は全くと記憶はないもの、高年齢の男性であったことははっきり憶えていた。記憶はないもの、高年齢の男性であったことははっきり憶えていた。
 背後に回った。
 剛は菱形の台座の上に大きな球体が載った墓を横目に見ながら、

「昨日弟さんがお見えに。てっきり交代で来られたのかと」
 「年生の少年が訪れたという。一年、もしかすると成長の早い小学校五、
 「どんな子供でしよう？ 人相や体格、特徴的な仕草など……」
 「弟はおろか、面識のある親戚の子もいないのだからきいてもしよ
 うがないのだが、ちよっとあえずきいてみた。大人しそうな、控えめ
 に笑う静かな子で……昔の子供みたいだな。大人しそうな、控えめ
 アッ、静かな子で……昔の子供みたいだな。大人しそうな、控えめ
 再び瞳孔を拡げ剛の顔を凝視した。」「
 「何か伝言のようなもの、残していかなかったでしょうか？」
 「さっだん興味が湧いてきた。」「
 「ああさうも言ったように住職の娘はついでくるように促し、もと来た
 道を引き返した。」「
 入本堂を兼ねた自宅にもどると、ドアを開けた女は剛を玄関に招き
 子を取り出した。電話をのせたミニタンスの引き出しを開けた。何かの冊
 子を取った。出した。黄ばんで縁の摩滅した和綴じの台帳のようなもの
 だ。開くと縦に罫線が入り、住所と氏名、たまに電話番号が並んでい
 た。」「
 「女は頁を繰っていちばん最後の書き込みを指で押さえた。」「
 「いけお任意でお名前、ご連絡先をきいてるんです。あなたもよ
 ろしければあとで……台帳を手に肩を寄せてきたので、剛はのぞきこも
 うとした。その台帳を手に肩を寄せてきたので、剛はのぞきこも
 「アッ、ダメよ！ たんにしろ個人情報世の中だから」
 「バサッ、と乱暴に帳面を閉じた。」「
 「駅に到着するとパネル式の発車時刻表を見上げつつ、
 「あと三分か」
 「改札機にSUICAをタッチし通り抜けようとした時、軽妙なチ
 ャイムが鳴って両サイドから肌色の板が出てきた。」「
 「いつもはそんなに遠距離まで電車に乗る機会がないから、けっこ
 うな額の料金を支払っていたことにその時初めて気づいた。それよ
 りも、自販機にもどってチャージしようとしてSUICAを投入した時、
 残高がピタリ¥0なのに驚いた。」「
 「無事に改札を抜け跨線橋を渡ってホームに下りた時、その暗合に
 ついて、まだほんやり考えていた。」「
 「もちろん単なる偶然に過ぎないが……」
 「剛はポケットから小さなメモ帳を取り出し、さっき書き込んだペ
 ーシを開いた。」「
 「ハクイ市ハクイ24……」
 「住職の娘に別れを告げ、寺の門をくぐり抜けた直後メモしたもの
 だった。」「
 「一瞬チラッと見えただけだから、それしか読み取れなかった。台

帳の罫線を無視して大きく稚拙な文字で書き殴ったような筆跡だっ
 た。たまに子供のような書体だった。手先の不自由な人物がやっとの思い
 でその横にはたしかなひらがなで『さとう：』と書かれていたよう
 だ。並んでいた。一月七日の四桁は0127と読めたが、これは剛
 が生年月日が一月七日なので、その横に携帯番号を記帳したのだが、
 の生年月日が一月七日なので、その横に携帯番号を記帳したのだが、
 裏側に記された文字を盗み見ることはできなかった。そこにはいつか街
 で見かけた何げない、けれどどこか心惹かれる情景や人との出会い、
 ふと胸に浮かんだとりとめのない思いなどが書き留めてあった。
 最近ではその歌詞に頭韻や脚韻が踏まれているものが割かれていた。
 プーが増えている。頭韻や脚韻が踏まれているものが割かれていた。
 まもなく上りの電車が到着しますとアナウンスが流れた。
 十剛はホームの端のほうへ歩いていった。清涼飲料の自販機に百三
 十円を投入し、迷わず下段の右から二番目のボタンを押した。はち
 番み、リハーンサルは午後五時から、喉のケアは大切だ。今夜はライブ本
 ルスクリーンで空と海が広がっていたので顔を上げると、車窓にはフ
 延々とした深い森や、視界が開けたと思ったら平凡な畑の連なり
 だ。海線、走る、紀勢線、海の前、低く積んだ波消しブロック
 ン「買いません」、父が張る、規制線、海の家、熱く揚げたアメリカ
 な流れた。景色から海にまつわる父の追憶へと移っていくのは自然
 だ。別れた家の父にアメリカンドックをねだり、にべもなく撥
 ねつけられた。：そんな思い出があるわけではなかった。無理に韻
 を踏もうとした。：そんな思い出があるわけではなかった。無理に韻
 ゆる韻に踏まれた。：そんな思い出があるわけではなかった。無理に韻
 自分の中の物語に忠実に。『
 もう一度ラップを試みる。』
 漁船、イカ釣り漁船、かば焼き三太郎、
 よっちゃんイカ、それは空腹、
 それらの日々、今日は空腹、
 父が帰る日、今日は空腹、
 から五百円玉を握って、コンビニの駄菓子コーナーへとよく走った。
 ルごとして一つずつを心掛けるのだが、いつもすぐ全部食べ切った。

地下鉄の駅に下りると案内掲示板には区役所へ行く出口が他の施
 と「吸い込まれているか！明る背を返す、剛の姿はキラキラした照明や
 りみで、若者に歌を振られた。まるでちょっと離れた顔見知り
 コピか、何かにぶつかって、目を
 ポケッ！と中へ伸び、小銭入れに指先が触れた。剛の手はズボンの
 ギター、スグの硬貨が一枚に指先が触れた。剛の手はズボンの
 出っ歯、若者の足、名前、バスが開いて置いてある。り
 鳴らした帽、輝いたさへ歩い、剛の耳がピクピクと動き、
 た先、構内から歩いた、若者が、剛の耳がピクピクと動き、
 そ、目下、降りる階段のほさよ、剛の耳がピクピクと動き、
 装、老若男女、雑さへ歩い、剛の耳がピクピクと動き、
 した、行き交う人々、混じった、歩い、剛の耳がピクピクと動き、
 の、改札に出ると、葱、カレー、菓子、パン、飲み物、お菓子、
 アンビケ、入った、葱、カレー、菓子、パン、飲み物、お菓子、
 別の立ち食い店、葱、カレー、菓子、パン、飲み物、お菓子、
 いうどの店、葱、カレー、菓子、パン、飲み物、お菓子、
 天王寺に着くと、腹だつたので、ホームを上つてすぐの立ち食
 だの中央は三本のミッドパン、インカム、筆跡鑑定は叶わなかった。
 「超簡単！紙を見返すと、どの英会話、入門編、
 容、紹介、赤、青、黄、緑、紫、黒、白、
 対、日本語、赤、青、黄、緑、紫、黒、白、
 ボックスを開け、青、黄、緑、紫、黒、白、
 後、父の遺品、懐かしさ、
 いくぶん、整理して、
 「剛が手に取ると、まっさらな硬球にはマジックで大きく、

設より大きな目立つ文字で書かれていたからすぐにはわかった。五番
 出口は食堂だった。ちよらんチタイムなので、食券機の前に
 は何かが行列を作っていた。足のほけ、替わり定食のAセットに
 なった。さっき食べ逃しためん類の置き、替わり定食のAセットに
 Bセットなどが魅惑の品ぞろえを見せていた。文字をグッとらん
 だ。食品サンプル本体から目を背け、お品書きの文字をグッとらん
 だ。ソースたっぶり、煮込みハンバーグ、
 外はサクッ中はトロリ、カニクリームコロッケ、
 外も中もヤニだらけ、歯にクリーム塗っけ、
 実際にはタバコを吸ったことは試みに、二度しかなかった。こ
 れも「ラッパ」は悪くなければ」という偏見に毒された結果だった。こ
 れはなかなかうまくハマったな」
 階段を上り、一階へ向かった。
 シー区民課に行く、整理券を取った。緑色の申請書に記入した。透明な
 シー区役所かぶせ旅の当から立ち、住民票の申請書に記入した。和歌山
 市駅からは、王寺駅までの車内です。いたものは、目的は戸籍
 謄本の取得、戸籍をさかのぼって異母弟がいるかどうか調べるので
 あった。結局は住職の娘の言「弟さんが……」を信じることになっ
 いた。少年、墓の掃除、墓前に花束、線香、ペットボトルの水、ワンカ
 ップ大関、イタズラに手間と費用が掛かりすぎている。例えるなら、
 隣の留守をねらって居宅に闖入し、お茶を沸かしお菓子まで置い
 ていくようなものだ。違いは、たのしみは、佐藤家乃墓」が
 非常に多いことだ。たのしみは、佐藤家乃墓」が
 非常にかっこいいことだ。たのしみは、佐藤家乃墓」が
 だ。杖の朽ちた木片でしかない貧相な墓、まるで境界画定線を示
 す。最後の可能性は、ボランテイアの間違だろうか？
 「最後の可能性は、ボランテイアの間違だろうか？」
 「それなら、素直に感謝したい」
 「それなら、素直に感謝したい」
 「佐藤タケルさん、」
 「佐藤タケルさん、」
 視線が立ち上がると、区民課のソファに座っていた女性、ほぼ全員の
 を感じた。よくあることだ。その動きに熱を失った。離れていくの
 を感じた。よくあることだ。その動きに熱を失った。離れていくの
 字で「ツヨシ」と申請することだ。その動きに熱を失った。離れていくの
 「本籍の記載が必須で、おたのふりガナ欄には、わざと大きな
 遺産相続の記載が必須で、おたのふりガナ欄には、わざと大きな

窓口に、つまた職員説明によると昭和五八年生まれ以降、つまり三〇年〇月〇日死亡に剛が〇歳の時「協議離婚により除籍」と記されて
 〇年〇月〇日死亡に剛が〇歳の時「協議離婚により除籍」と記されて
 名づけて父・剛の父の名前の欄は×が打たれ「平成〇〇
 籍本を開いた。区役所でもらった封筒を出した。四つ折りに置
 京都市駅を出ると四か所も封筒を出した。四つ折りに置
 思ひに、この区役所でもらった封筒を出した。四つ折りに置
 乗客の半数以の上は座席に掛けた。もうしばらく電車の揺れに身を任せ
 全然SNのいせじやないが、なんとも気が変わるまでいた。
 うと予定した。少前、五時からハサるまで。市内を散策しよ
 止まった。降り、計を見たら、ユツクをつかんだ。手がやんわりと
 い列車は、だんを消し、ドマホリ、京都駅の手がやんわりと
 SNNの画面を消し、ドマホリ、京都駅の手がやんわりと
 違う。ぬら、礼、MCSATOの参加決定！
 旧友の「吉野自身、藤がはるばる関東から駆けつけてくれます！
 指は、勝手に踏む、それ以前のか？
 貫けよ、な、ムに、お持ちですか？
 ダセ、ない、指先が止まらな。かよ
 滑って、その後、指先が止まらな。かよ
 のごく一部の見込み？てやるの？
 文化祭（笑）
 懐かしい。あ、何より
 投稿も混じった。その日、その男の同級生らしきコメントも増えて
 高い。でも、大学の授業、郵便局のバイトを休んで来てるんだから、そうにちが
 謝「実際、今度も郵便局のバイトを休んで来てるんだから、そうにちが
 おさえて、剛オリーブの曲で行こう」という他のメンバーの意見を感
 口ッ力するが、スラックだから長身の反応だった。髪に細面、いかにも
 矛盾がある。スラックだから長身の反応だった。髪に細面、いかにも
 一ガチガチのロックだから女にウケない」というさっきの結論とは

七歳以下の子は戸籍上では浩二には存在しないとのことだった。その可能性は十分ありえなければ話は別、そして生前の父の素行から戸籍謄本をリユックにしまい、かわりにメモ帳を取り出した。また最後の書き込み頁を開いた。

「ハクイ市ハクイ24：：」

「なかつた。初めて聞く地名なので、ウイキペディアや市の公式ホームページを閲覧した。」

北陸地方らしく、日本海を望む美しい海岸線、新鮮な魚介類を味わえること以外、年間十数回UFOが目撃されるため地域おこしとして「UFOのまち」を前面に押し出していることしか目を引くものはない。

さらに周辺サイトをのぞいていると、ふとある記事が目にとまった。「羽咋を舞台にした作品」として松本清張作「ゼロの焦点」が挙げられていた。物語のあらすじは：：

主人公禎子は新婚一週間目にして出張に出かけた夫が失踪してしまふ。夫の手がかりを求め、出張先の金沢へと向かう禎子。同じ頃、石川県の自殺の名所として知られる海岸に身元不明の遺体上がる。警察からの連絡で禎子は遺体の確認のため羽咋の海岸へと向かうのだ。：：

自転車のサドル、盗難に注意、盗られたら警察、盗られるのも警察、出過ぎには注意してな、好きに乗っていいからね。スピードの出ていた。トの前の空き地で、浩二が見たことのない自転車にまたがった。異様な存在感だ。

ダルも古びていたが、近づいてみると赤いフィルム以外、サドルもペダルも爪先した。大きな自転車。友達と自転車どうしで出かけた。実際に走ってみると異常な速さで、友達と引き離してしまうだけだった。チエーンがなく、ペダルの回転が車輪に直に伝わるからだ。

せ合うように立って、なぜか別人にみえたのは警官に挟まれてるせいかもしれない。た。剛が学校から帰ると、アパルトの前で三人の男が身を寄

り他人のように無反応に近づく。剛のほうを見た浩二だったが、やはり警官のよう。人は無反応に近づく。剛のほうを見た浩二だったが、やはり

スコップの人は無反応に近づく。剛のほうを見た浩二だったが、やはり

塗料が少い。剥がれ、赤い粉末が地面にこぼれた。濃い緑色の地

肌塗料が少い。剥がれ、赤い粉末が地面にこぼれた。濃い緑色の地

の定番パーイテムを着ていた。見るからに煤けた生地の状態から、安く買
 った警官は白い手袋をはめた左手でぬぐうと、黒い字で「府」と読め
 た。警官はさらには拭いた。うつつすら「警」に似た文字が浮かんできた。胸
 ツッコイ警官が出てきた。音を立てずゆっくり階段を下りてきた。胸
 の赤いペンキの缶を抱えていた。帽子のつばは手にかけて、軽く会釈する仕
 警自転車の前でずっと作業の様子を見守っていたヒゲの濃い太った
 草官が剛に近づいてきた。制帽のつばは手にかけて、軽く会釈する仕
 息をさせた。柔らかな笑顔がだんだんはつきりしてきた。
 帰りは遅くなるかお父さん、これからけいさつに大事な用があるから。
 物のこの列車はまもなく終点の敦賀に到着します。どなた様もお忘れ
 「敦賀から先、乗り換えのご案内です。途中下車しなければ、リハーサルに
 間に合わない、到着駅ごとに立ち上がり、また座るを繰り返した結
 果大丈夫。こっちがバンドの音に乗せるのだから、バンドに迷惑は
 かけない。これから始め送ってもらったデモテープを流して何度も練習
 してるから怠りはないはず」
 し。スマホで路線案内を調べると、金沢まで福井経由で行き、特急で
 京都まで引き返すのが最速だった。
 敦賀駅に下りると、すでに停車している福井行き列車に乗った。
 サマホを開き吉野にLINEで、すまないが予期せぬ急用でリハー
 スルに間に合わない旨を伝えた。
 きながら小さな声でラップを始めた。落とされたデモテープを聞
 乗客の誰かから走り出した。列車はあと二駅で金沢に到着するとさっき
 色路・並行して走るまっすぐな海岸線、その先にはるか地平線ま
 で広がる日本海の荒々さを思い描いていたのだが。
 国境の長い橋、タネル、抜ける、そこは雪国
 陸境の短い橋、タネル、抜ける、そこは水田、
 また抜ける、そこは製作所、
 だんだん飽きてきた。パチンコ屋、そこは製作用、
 ラッブに続く。それでもうわごとのように韻のない単調な
 ジヤンパーを着ていた。見るからに煤けた生地の状態から、安く買

った古着のようだが、いつもの長くて、長い。ここで買ったのは、懐かしい感じがなかった。

 大変長らくの乗車。次は終点、金沢、金沢。

 さすがに、街に近づくと、向こうの建物、高くなっている。

 施設も高く、上を突き出ている。雲の中、隠れた。

 のビルも、雲の上、突き出ている。雲の中、隠れた。

 剛にも、これ、夢、パカッ、さうだ。だから、昼間、なにが子供

 いる。月、下で、傘、パカッ、さうだ。だから、昼間、なにが子供

 たち。乗せ、濡れた。傘、パカッ、さうだ。だから、昼間、なにが子供

 た。高速で、濡れた。傘、パカッ、さうだ。だから、昼間、なにが子供

 を。一つ、一つ、ポトポト、下界に落ち、雨、滴、跳、飛、す、み、たい、な

 急。一つ、一つ、ポトポト、下界に落ち、雨、滴、跳、飛、す、み、たい、な

 一つ、一つ、ポトポト、下界に落ち、雨、滴、跳、飛、す、み、たい、な

 一つ、一つ、ポトポト、下界に落ち、雨、滴、跳、飛、す、み、たい、な

キが一七歳の時だった。ある日、高校から帰宅すると、ちゃぶ台にハガ

 佐藤剛様、差出人は佐藤浩二と書かれていた。裏返すと、宛名は

 今日から旅に出る。二度と会うことはない

 帰り道のない、永遠の旅。二度と会うことはない

 これも人の世の定めと知ってよい年頃

 搜索不要（警察への届け出はもってのほか）

 リスの足もとに詳しい人生案内あり

敷いてあった。リスの置物を重しにして、ルーズリーフが二枚

 衣装ケースの上、リスの置物を重しにして、ルーズリーフが二枚

 びっしりと細かい字で箇条書きされているのは、

- ① 毎日銭湯に行くこと
- ② 洗濯は二日に一回すること
- ③ 行きづまった時は音楽を聞くこと
- ④ 日記はつけたほうがいい
- ⑤ タバコは吸ってもいいが、一日何本と決めておくこと
- ⑥ 酒も同様
- ⑦ なるべく毎食キャベツを食べること

で、最後の④まで読んだが、具体的な生活の知恵のようなもの

 ルーズリーフの二枚目にいたのは、唐揚げ、カレー、ピザ、煮

 物、切干大根など、数少ない二のレパートリー。現実への架け橋と

 一、それなら、生活費はどうか？ 現実への架け橋と

 なった。そのように、遅く父は帰宅して、経済問題は杞憂に終わって

 が。結局、その夜の遅く父は帰宅して、経済問題は杞憂に終わって

 ビルは開けると、電車は金沢駅に停車していた。ここにも華麗な高層

「飛び降りるビルを探してあちこちの屋上に登ったけど。やっぱり濡れたオールの首筋をぬぐいながら、と勇気がいるよ。」
 「た。到着後しばらくたったようで、同じ車両に客の姿はなかった。」

「電車を下りると、人の流れるまま橋を渡り、SUICAをチャージして改札の前まで来た。発車時刻と時計を見比べた。発車まであと一時間の間、あれを買った。駅の改札を出た。センターでバンドメンの差し入れを買った。改札を出た。サイフを握りしめた姿勢のまゝ、券売機で特急券を買った。乗車券を買おうとサイフを握りしめた姿勢のまゝ、もう一本、あとでも。」
 「剛の出番は八時頃の予定、このまま特急に乗ればちょうど七時半過ぎには着くはずだ。」
 「もう一本遅らせれば八時半過ぎ。」

「別の真打場と許されんばかりに、わざと遅く出る気はないが……」
 「グンと大きくふれる。ライプ終了後どうせ朝まで演者・客とも飲み

「歌うのは土曜日、それならば飲み会のさなか、酔ったバンドをバック

「結局、忘年会の余興みたい。もう核心はすぐそこにある。」

「聞きたるところ、俺のラップを。」
 「……アッ、一人いた。」

「さあ、これからどうすれば……」
 「た。羽咋駅に降り立つと、空はもう暗くなりはじめ、体感真冬の寒さだ。民宿や個人食堂、土産物屋や釣具屋などがそれを取り囲んでい

「電車内で調べたところ、羽咋市羽咋という地名はなく、最も近いのは「羽咋町」だった。ところがその羽咋町も番地の前に「ア・イ・

が下りてきた。階段から足音がきこえ、赤いドレスを着た妙齡の女子が、
 ターに差した。女の指差した足元のコンセンストに充電器のボタン
 パド下戸の悪女が指した足元のコンセンストに充電器のボタン
 テキブの定番ドリルを兼ねての甘いヨツを、
 は好きで、お決まりに、あちこちで、
 が爆音で、フ口アを揺ら、あちこちで、
 なけれと、再始動する。あちこちで、
 パも、トッ、と、再始動する。あちこちで、
 度ッ、トッ、と、再始動する。あちこちで、
 ポッ、トッ、と、再始動する。あちこちで、
 て剛心。木店の外に流れては、
 Dの姿は、く、ラ、ソ、ウ、リ、隔、の、
 段の手前は見ると、ソ、ウ、リ、隔、の、
 だや、大目、ス、ナ、ク、ハ、者、に、切、り、な、
 ル。当りの前、ネ、シ、ヨ、ク、ラ、ブ、の、
 力ウッキの、奥の子がおぼろげに、
 物初め、と、二席、で、す、た。忍者の忍で、
 剛が、空いて、土足の、タ、席、は、す、べ、て、
 二階アツ、と、土足の、タ、席、は、す、べ、て、
 四つあ、と、土足の、タ、席、は、す、べ、て、
 店内は、大盛況、で、す、た。忍者の忍で、
 椅子は、意、外、に、改、築、し、た、名、座、に、
 店、の、ド、ヤ、レ、イ、マ、セ、！
 に、さ、え、と、な、ら、な、か、ら、分、は、ス、
 白、と、な、ら、な、か、ら、分、は、ス、
 白、と、な、ら、な、か、ら、分、は、ス、
 白、と、な、ら、な、か、ら、分、は、ス、

